



境内には、毎年沢山の花が咲きます。六十一号より裏面に宝清寺の草花を紹介しています。今回は梅の花の紹介です。

五重塔建立の意義

五重塔の「塔」とは古代インド語では、「ストウーパ」や「チャイテイヤ」と言います。「ストウーパ」は、お釈迦様や高僧のお骨を納める「舍利塔」の意味があります。「チャイテイヤ」には、経蔵の意味があり、厳密には双方とも混同して使われている場合もありますが、前者の「ストウーパ」の考えが中国に伝わり、「ソトウパ」と呼ばれるようになり、現在、我々が言っている「塔婆」となりました。そういう意味では、皆さまからいただいた「五重塔建立寄進」は、皆さまの先祖供養の最大級のものと、言っても過言ではありません。昨今では、一人で五重塔を建立することは金銭的にも大変なことです。五重塔を建立する機会に恵まれ、建立者の一員として名前を連ねることができるとはまたとないチャンスと言ってもよいでしょう。

また、法華経の「見宝塔品」では、お釈迦様の証明仏として、多宝如来と多宝塔が出現する場面があります。この証明仏とは、お釈迦様のお説きになる「法華経」はまったく真実であることを「証明」するために現れる仏様であり、「法華経」の一番重要な部分である「如来寿量品」では、この多宝塔の中に、お釈迦様と多宝如来のお二人がお座りになり、教えを説かれています。

五重塔の「五重」についても諸説ありますが、インドでは宇宙の基本的構成要素を「空、風、火、水、地」の五つに分ける考え方があり、生きとし生けるものすべての基本として、宇宙と我々は一体であると考えます。地球が病めば、人間も病みます。我々は生きていくのではなく、生かされているという感謝の心を持って、人生を送らなければなりません。

すがとれた生き方に努めていくことが、「中道の教え」です。喜びに有頂天にならず、悲しみに平静の心を失わないよう心掛けることです。いそがず、あせらず、あわてず、一度きりの人生を「人間としての道理」に則り、ゆつくり歩いて、人間らしくいききたいものです。

【身延山五重塔報告】
身延山久遠寺の初代五重塔は、江戸時代の一六一九年（元和五年）当時の加賀藩主前田利常の母・寿福院の寄進により境内に建立され、人々の信仰の象徴となっていました。一八二九年（文政十二年）に落雷とみられる火災で焼失しました。一八六五年（慶應元年）に再建

されましたが、一八七五年（明治八年）の大火で本堂・祖師堂など一四棟が被災した時に焼失しました。以来、その再建が悲願となっていました。一八七九年（明治十二年）に「心の拠り所である五重塔を復元したい」と、信者や地元住民の願いが一つになったのは、二〇〇四年（平成十六年）でした。そうした声を受けて、身延山久遠寺第九十一世藤井日光猊下の尽力により、二〇〇六年（平成十八年）に着工し、二〇〇八年（平成二十年）秋に五重塔が身延山久遠寺に百三十三年ぶりに再建され、平成二〇年十一月五日に竣工式が行われました。身延山中腹から切り出した樹齢五百年の杉などを「心柱」に使い、本瓦・形銅・板ぶき、高さは三十九メートルで、国指定文化財の木造五重塔と比較すると、国内四位の高さを誇るものです。昨今の世相は、日蓮大聖人が活躍された鎌倉時代と同様に大変混乱しています。そのような世相の中、五重塔が「生きとし生けるものの和平と幸福願 現のシンボル」となるのではないかと思います。この度、完成した五重塔建設には、皆さまの任意の寄付（総額五百万円）を名簿を添えて宝清寺として寄進させていただきます。完成した塔の一階には宝清寺の名前が刻まれています。五重塔落慶式は平成二十一年五月十三日（十七日）までの五日間実施される予定になっています。ご協力戴いた皆さまには心から御礼申し上げます。

「法華経」はまったく真実であることを「証明」するために現れる仏様であり、「法華経」の一番重要な部分である「如来寿量品」では、この多宝塔の中に、お釈迦様と多宝如来のお二人がお座りになり、教えを説かれています。

住職ひと口法話 (第十七)

新しい年を迎え、世相は悪くなる一方で、世界の恒久平和と人類の安穏な生活のために、今、我々ほどのような心構えを持つたらいのか。アメリカ大統領オバマ氏は一月二十日の宣誓式で、「我々アメリカは建国以来様々な恐怖に立ち向かい、数々の勇氣を持つて乗り越えてきた。我々は恐れを抱く事ではなく、恐れを乗り越える事だ」と述べた。四十八年前のケネディは大統領就任演説で、「わが友である世界の市民諸君、諸君の国が諸君のために何をしてくれるかを問ひ給うな。あなたが祖国のため、何ができるのか考えて欲しい」と述べています。両大統領は、困難を乗り越える勇氣と自立を訴えています。日本も社会は暗雲に包まれ、混乱からの出口が見つかからない状況にあります。タクシー運転手をお金目当てで殺害した介護士や出会い系サイトで知り合ったその日に女性を殺害した男性、親に勉強しろと叱られ家に放火した息子の事件など、動機が自分勝手な短絡的です。私は平成六年から家庭裁判所の調停委員をしています。最近の申立の傾向は以前と違って、自分の考えが相手から認められない事に不満を持ち、自分の思いを遂げるために裁判所を利用してしまっただろうか。民主主義社会の自由をはき違えているのではないかと思います。自分中心に世の中が回っているかのように思い、自分勝手になってしまっただろうか。民主主義社会の自由をはき違えているのではないかと思います。「自由」には、フリー（自分勝手な自由）とフリーダム（ルールに則った自由）があります。社会の一員として生きている我々は当然社会のルールを踏まえて自分の思いを実現していかなければなりません。今こそ、一人一人が「人間の道理や人生の規範、社会のルールをきちんと把握し、自分を客観的に見る習慣をつけ、自ら考え、自ら判断し、自ら実行するという、もとの道理の上に立脚した自立を心掛ける必要があるのではないかと思います。

日蓮聖人 遺訓 (十七)

「仏法と申すは道理なり道理と申すは主に勝つ物なりいかに愛し離れじと思ふ妻なれども死ぬればいかいなし」
(四糸金吾殿御返事)

春のお彼岸
三月十七日（火）〜二十三日（月）
裏面に彼岸の詳細の記事があります。

世相が悪くなった今こそ、お釈迦様が説かれた、「中道の教え」を自覚しましょう。「中道の教え」とは、結論的には「普通に生きなさい」ということです。お釈迦様は二十九歳で出家され、三十五歳で悟りを開かれたと言われています。悟りを開かれるまで肉体を徹底的に酷使する苦行を行い、正しい道に目覚めたのです。お釈迦様は断食をよくされ、死の直前に至るようなことを何度も体験されたそうです。

また、出家されるまでのお釈迦様は釈迦族の王子でしたから、その生活は今日のいけば華楽的なものだったようです。

お釈迦様は「苦行」と「快樂」の両極端を体験され、その中からは決して真の安らぎは得られないと悟られたのです。「逆境」にも「順境」にも偏らないこころのパラン

お釈迦様は「苦行」と「快樂」の両極端を体験され、その中からは決して真の安らぎは得られないと悟られたのです。「逆境」にも「順境」にも偏らないこころのパラン

宝清寺年中行事

三月	彼岸中日・塔婆供養
四月	八日・花祭り
七月	十七日・孟蘭盆会供養
七月	十七日・お施餓鬼法要
九月	彼岸中日・塔婆供養
十月	十二日・お会式法要

日蓮宗の聖日

二月	十五日・釈尊涅槃会
四月	八日・釈尊降誕会
四月	二十八日・立教開宗会
五月	十二日・伊弉諾尊御誕生会
七月	八日・松葉谷法難会
八月	二十七日・龍ノ口法難会
九月	十八日・池上御入山
九月	十三日・宗祖御会式
十一月	十一日・小松原法難会

御祈願・御供養

交商虫方除星安開
通繁盛安
厄位祈
運産祈
全願封除願祭守守

宝清寺では、花祭り（灌仏会）、お盆（孟蘭盆会）の施餓鬼法要、日蓮聖人のお会式を毎年厳修しております。
このほかにも諸祈願や自動車のお祓いや、年忌供養・祥月命日供養・月命日供養等も行っております。詳しくは寺務所までご相談ください。

暑く寒くも彼岸まで

お彼岸は古来から伝わる日本独自の仏事です。八〇六年（大同元年）に、崇道天皇（早良親王）の勅命によって彼岸会が行われたのが始めとされていいます。彼岸会の発祥理由には諸説ありますが、太陽が真東から昇り、真西に沈む中日は、西方浄土が一年で一番近く日だからという考え方もあり、大阪の四天王寺などでは、彼岸会が盛大に行われています。また「彼岸」の名称は「日願」に通じることより付されたのではないかと考える人もいます。

「暑く寒くも彼岸まで」ということわざがあるように、春彼岸は寒い冬から春一番を迎え、暖かい季節の到来を意味し、逆に、秋彼岸は暑い夏が終わり心地よい季節の到来を意味します。このように心地良い季節は、私たちにとっては怠り心を起こす季節ともいわれ、その怠り心を戒めるためにも中日のほかに六日間を彼岸の期間としています。この六日間は菩薩の修行である六波羅蜜行を実践しなければならぬ日ともいわれています。

六波羅蜜の修行の一つに布施行という修行があります。金品をお寺に奉納するだけがお布施ではなく、先祖供養を行うことも布施行のひとつなのです。墓所に古い先祖がはいっていても、皆さの身体のなかに脈々と先祖様の遺伝子が流れているのですから、彼岸とお盆の三日間くらいは、お墓に入っている仏様の供養だけではなく、ご先祖様の供養をなさってみたいと思っております。

健康の秘訣

「散歩」があります。散歩は無理な運動とは違い、その日の体調に応じてできる手軽な運動です。また、気分転換にも最適です。四季折々の草花を見つけて愛することは精神的にもよいでしょう。名所や旧跡（古いお寺など）を見ながら散歩すれば見識も広がり、家族との会話も広がるでしょう。

注意していただきたいのは運動量です。はじめから頑張つて、何時間も歩いたら疲れるかもしれませんが、数十分くらいのが嫌になりますので、数十分くらいからはじめられたほうがよいでしょう。用意するものとして、近隣を歩くのであれば、ハンディタオルや水を用意するくらいでよいですが、本格的に歩くとなれば、運動靴も歩きやすいものを選び、地図、帽子、サングラス、暑い日には日焼け止めの用クリームを用意したいものです。また、名所、旧跡や花鳥風月を楽しむたいと思つておられる方は、それらの掲載されている雑誌や図鑑を持ち、デジタルカメラなどを用意して行けば良い思い出も作れ、散歩の延長として小旅行へと変わります。

健康の基本は、呼吸法にあると言われるています。新鮮な空気をสูうことは身体にとつて良いことです。春先はまだ寒い日も多いですので、その日の天候に注意し、まずは近くを散歩されてはいかがですか。目的がなくゆつくりと歩いてみると、見慣れた風景もひと味変わって見えてくると思えますよ。

御祈願と星祭り

寶清寺では、毎年二月三日の節分に御祈願を行っております。「節分」は字のごとく節が変わる日であり、旧年の厄を払い、新しい年に良い星がめぐってくるように、という意味もあり、「星祭供養」もおこなっております。今年も多くの皆さまから星祭、星供養、身体健全、家内安全、交通安全等のお申し込みをいただき、無事に節分を迎えることができました。

毎年、年始めに皆さまにお配りしている「日蓮宗御寶鑑（暦）」には、本年の運氣が掲載され、今年が良い年か悪い年かわりかが書かれています。この運勢を一つの目安として、注意が必要な日や、新しい事業をいつ始めるかなどに利用されている方も多いようです。

また、正月、五月、九月の三ヶ月は、祈願月ともいわれ、日頃から神仏や、ご先祖様を大切に、供養している方は、この月にお願いをすると利益があるといわれています。

宝清寺の草花

今年は何年より少し早く梅の花がほろび始めました。梅の花を見ると思いたすのが昔、原道真の句です。
「東風吹かばにほひをこせよ梅 花主なしとて春を忘るな」
『拾遺和歌集』には「忘るな」とあり、治承四年（一一八〇年）頃に成立した『宝物集』には「忘れそ」とあります。

私がかつては受験合格の祈願に行きましたが、めでたく合格したあかつきには、お礼参りにいかなければ「かたおがみ」となってしまう、次ぎの願掛けに効力がないともいわれています。

お世話になった方への真心あるお礼は人の道ではないでしょうか。



宝清寺の行き方